

浄青神奈川

大本山光明寺御法主 藤吉慈海台下御染筆

紙関機青浄川奈神

第 11 号

発行日 昭和59年8月1日
 発行所 鎌倉市材木座6-17-19 光明寺中神奈川教務所内
 浄土宗中神奈川教区青年会
 発行人 野中岳道
 編集委員会 康雄 栄
 本井 久智
 森西 吉水

神奈川教区浄土宗青年会は創立十周年を經過し、諸先輩の眞摯な努力のおかげで一段と浄青活動が發展成長してまいりました。先に発刊いたしました十周年記念誌にその足跡をたどることができ大いに敬意を表する次第であります。

さて、神浄青前会長の里見嘉嗣師が本年四月に開催された全国浄土宗青年会理事総会において全浄青理事長に就任され、神浄青会長二期目の一年間でその役を退任されることになり、去る四月二十一日の神浄青定例総会において、私が神浄青第五代目の会長に選出されました。

私は里見前会長のもと三年間副会長として神浄青の活動に参画させていただきました。たいしてお役にはたせませんでした。里見師の全浄青理事長就任に伴い、その執行部が教区内寺院（港南組・浄性院）に設置され、多数の我神浄青会員諸師が執行部の役員になつて事務局を運営しております。

のことは、神浄青が設立十年にして全浄青をリードする役目を担つたと自負し、その責任の重大さを痛感しております。

また、私が会長就任早々の六月十四日・十五日に大本山光明寺において開催された「第十二回関東ブロック浄土宗青年会総会・研修会」（神

模索する青年僧侶に教化活動の指針をあたえていただき、まことに感銘深い有意義な大会でありました。この大会は、テーマを「自行・化他」とかけ、我神浄青が歩んだ道程にも活動の課題を「自行・化他・和合」と設定し、飛躍的に浄青活動を發展させてきた経緯があります。



新会長に就任して

野中岳道

奈川大会）では、大本山光明寺ならびに神奈川教区内寺院の絶大なるご支援をいただき成功裡に大会を終了することができました。また、光明寺執事長北邨謙順上人のご講演をはじめ、我浄青の先輩の平野仁司師・坂野泰巨師・水野賢世師による自らの教化活動の体験的なお話は、我々

まさに浄青活動の目標は、自己の絶え間ない求道心の向上とお念仏によつて苦悩する人々をお救いし教化することができると暗に模索し、いかに実践化できるか対処していくことだとおもいます。そして、恐れを知らない青年僧として情熱を燃やし新しい感覚で宗教活動を真剣に取り

組める時機に相応して、念仏教化すること以外には我々神浄青が歩む道はないと確信いたします。

さらに、先日の六月三十日に小田原浄青が開催した通夜念仏に参加させていただく機会を得て感じたことがあります。私は、最初翌日の都合で夜半までのお付き合いのつもりでおりましたが、いつのまにか時間を忘れて最後まで礼拝を行じ、お念仏を唱えて朝を迎えてしまいました。

もし、自分一人ならできないことです。同信同行の仲間がいたから夜通しできたことです。光明寺大殿の阿弥陀様を眼前近くに拝しお念仏を唱えたことは、宗祖法然上人様が比叡山の山深い黒谷の別所で称名念仏によつて衆生をお救いできると確信したことを思い起こさせ、心が洗われる思いでした。また、光明寺ご法主藤吉滋海台下も最後までご臨席なされ、我々にとつて強い励みになり貴重な時間を体験いたしました。この念仏を通して自行を進め、それが化他へとつながるのではないのでしょうか。

浅学非才な私ですが、先輩諸兄のより一層のご指導と会員皆様のご尽力にすがり、神浄青の更なる發展へと邁進する所存です。諸大徳ならびに会員諸師のご指導ご協力を心からお願ひする次第です。



浄青に期待する

大本山光明寺御法主

藤吉慈海台下

善導大師は「日没無常偈」の中で各聞、強健有力時、自策自勵、求常住、とおっしゃっている。たしかに人生は短い。若いと思っても何時の間にか六十を過ぎ七十に近くなる。そして、うんと勉強しようと思ってももう遅い。視力が衰え根気が無くなる。

若い間にしっかり勉強し努力することである。「強健有力の時自策自勵して常住を求めよ」と善導さまは叫んでおられる。「常住なるもの」とは何か。永遠なる真理であり、永遠に変化しない一物である。このぎろりとした一物をはつきりつかまねばならぬ。それをつかんでいないから何才になってもふらふらして煮えきらない。そんなお坊さんが浄土門にも多い。善導さまも、そんなお坊さんをたくさん見られたに違いない。だからこそ「自策自勵して常住を



浄青の組織ができて何年かたつたが、本当に常住なもの求めていられるか。宗教者にとつて最も大切なぎろりとした

一物を本当に自覚しているのかどうか。深く反省してほしいものである。すくなくとも善導さまの「求常住」の聲が聞えて来なければなるまい。浄青の皆さんに期待するゆえんもそこにある。常住なるものが自分のものとなるまで自策自勵することである。



大本山光明寺第一百十世

藤吉慈海御法主晋山式

昭和五十九年四月三十日、徳川家康の菩提寺である岡崎の大樹寺より大本山光明寺第一百十世の御法主として藤吉慈海台下の晋山式法要が盛大に執り行なわれた。

私達浄青会員も四月二十四日の打ち合わせ会に二十名の会員が朝九時より参集し、当日には三十五名と実



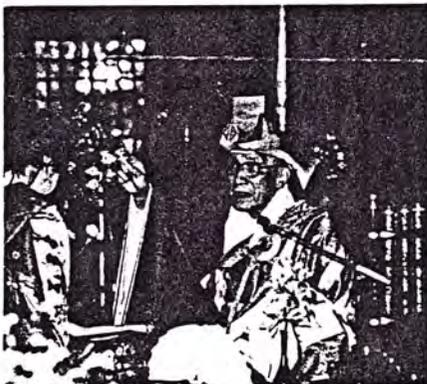
に三分の一以上の会員がお手伝いにあたり、その喜びをわかちあった。

晋山式法要は、午後春うららかな陽ざしをあびて九品寺より新御法主を中心としてお練りが出発し、材木座の町の人々から暖かいまなざしで迎えられた。お練りには、かわいい稚児も加わり一層晋山式法要に彩り

が添えられた。大殿には、全国各地から宗門内外の来賓八百人が参列し、また光明寺の発展と新御法主への期待に胸ふくらませて参拝された善男善女が境内を埋めつくし門出を祝した。

国内はもとより、国際的視野で幅広く御活躍されている藤吉慈海台下が光明寺の御法主として晋山されたことにより、私達浄青会員が、二十一世紀に向けて飛躍する上で真近に御教示、御指導いただけることは誠に幸せであり、浄青会員一同心よりお祝い申し上げます。

(吉水智栄記)



全浄青理事長就任にあたって

前神浄青会長 里見 嘉 嗣

宗祖御降誕八百五十年の佳辰を目前にする昭和五十六年春、神奈川浄青第四代会長を拝受以来、早や三年の才月を経るに至った。宗祖御降誕八百五十年、神浄青創立十周年、関プロ浄青神奈川担当研修会（実行委員長）という勝縁のもとに、会員諸師と苦楽を共にして同入和合海のなかに各種事業を円成させて頂いた。尚事業の詳細については十周年記念誌に掲載されているので詳覧して頂きたい。十年という節目を迎え、今後新たな活動が期待される現下にあつて、残任期間を次代を担う若い会員諸師を中心に青年として伝弟子として、法然門下として本当に生きているのか、

推輓を賜わり、理事総会において全国浄土宗青年会理事長の重任を拝受する事になった。神浄青の活動が教区内外から刮目される会に発展したとはいえ、母体となるべき組浄青組織の脆弱性に伴う活動の停滞は否定できない。もちろん全ての組浄青で

はないが、組織と機能の再点検を真剣に考えなければいけない組浄青があることは事実である。より一層の活性化を計る大切な時期に任期を全うせず、しかも全浄青理事長に就任することによりさまざまな問題が惹起することは小柄の意とするところではない。しかし幸いにも会員諸師のご理解とご協力を得、副会長野中岳道師が次代のリーダーにバトンタッチするまでの間、会長職を受諾して下され、神浄青の体制が整ったことは、全浄青に全力投球できる小柄にとつて望外の喜びであるが、その職責を全うできず関係各位に多大なご迷惑をおかけし、お心を煩わせてしまい慚愧に耐えない。在任中、教区、本山諸大徳、寺庭婦人会員には温かいご支援ご教導を賜わり、更に会員諸師の絶大なるご協力を頂き衷心より拝謝申し上げたい。

全浄青は昭和四十五年春、発足以来十四年歴代理事長を始め先輩諸師の一致団結したご活躍により、現在会員二千人を擁する大組織に発展してきた。組織の肥大代は大きな原動力となる反面、政治化しセクショナリズムに陥る傾向がある。排他的となり旺盛な批判精神もときには必要であろうが、浄青活動を通じての適切な忠告助言とは根本から違う。罪悪生死の凡夫である自覚のもと、足らざるところはお互いに補うとい

う自利利他の精神なくして全浄青の組織と機能を円滑に働かせることはできない。舵取りの困難さと責務の重大さを痛感するが、小柄を支えてくれる高島事務局長を始めとするスタッフが共に行動してくれることは心強い限りである。心合わざれば肝胆も楚越の如しの言葉もあるが、心ある人に恵まれた因縁に感謝したい。第八期全浄青は「青年に念仏を」の

前期テーマを踏襲し新たに「さまざまな地域と機根をみつめて」のサブテーマのもと行動を開始した。詳細は紙面の都合上、次号に掲載させて頂くが、全浄青を発展せしめることがそのまま神浄青の発展に繋がるという決意のもと精神を期したい。諸大徳、会員諸師の旧に倍するご支援をお願いする次第である。

第14回 全浄青中央研修会

テーマ 「青年に念仏を」

—さまざまな地域と機根をみつめて—

期 日 8月29日(水)～30日(木)

会 場 宮城県・秋保温泉

参加費 12,000円

担 当 東北ブロック浄青

◆行事概要◆

〈29日〉

◎基調講演

仏教大学助教授 広瀬卓爾先生

※申し込み・お問い合わせにつきましては、神浄青事務局または下記全浄青事務局まで

〈30日〉

☆実践報告

☆各ブロック発表

全国浄土宗青年会

本 部 〒605 京都市東山区林下町400浄土宗社会局内 ☎075-525-2200(代)

事務局 〒241 横浜市旭区本宿町95 浄性院内 ☎045-391-1825



第12回 関東ブロック浄土宗青年会
総会・研修会

S59. 6. 14~15
〈於〉大本山・光明寺

大会テーマ

《》 自行・化他 《》

第十二回関東ブロック神奈川大会は『自行・化他』の大会テーマで六月十四・十五日の両日、鎌倉材木座の大本山光明寺を会場にして開催された。参加者は他教区九十六名、神奈川教区三十五名と多数の仲間が集い活発かつ充実した大会となった。

大会は、糸原勇慈理事長のもと開白法要が営まれたのち総会が開かれ、任期満了の糸原師から千葉教区の境順正師に理事長が引きつがれ、神奈川教区から野中岳道師が副理事長に選任された。基調講演は、光明寺執事長北邨謙順上人により「三祖記主禪師の自行化他」との講題でお話しをいただき、三祖良忠上人のご生涯における自行化他をあげ存分に勉強させていただいた。また今回は、光明寺に伝承されている十夜法要（引声法要）を里見実行委員長が導師となり我々神浄青会員だけで行ない、初めて見る他教区の方々には深い印象を与えたよ

うであった。

懇親会は、七時より鎌倉駅前鶴ヶ岡会館に藤吉慈海御法主台下をお招きし、総勢一、二四名が参集し、途中仮装をした会員も出てきてなごやかなうちに第一日を終了した。

第二日目は、おつとめ後、藤吉慈海御法主台下から御自身の体験を通して御法話をいただいたことは大変私達にとり有意義なことであった。

シンポジウムでは「自行化他」―現代における教化―として、平野仁司師、坂野泰巨師、水野賢世師より活動体験等の報告後、会員との活発な意見交換がなされた。

今大会は、天候にも恵まれすばらしい環境のもと成功裡に閉会した。

(吉水智栄記)



大本山光明寺御法主

藤吉慈海台下の御法話を拝聴して

副会長 戸松秀明

藤吉ご法主台下は、観無量寿

経の一節「第九真身観文」を引用なされて「仏様というお方は光の仏様でその光の中から沢山の仏様・化仏また菩薩が現れ宇宙全体にその仏身が広がっている。その仏身とは大慈悲であり、お慈悲の心というものが仏様の御心である。

その御身体は、光の姿において宇宙全体に広がり、念仏する人々を救って下さると説かれてある。仏は百億に分身し、百億の仏にご自分の身体を分ちあってそうして人々を救っていく」と説明され、我々青年僧に対し自分達もそういう仏の分身であり、百億の仏の一人として、自覚を持ってと激励された。自分がその使命を持った法身であり、百億分身の一つであるという自覚を持って、自分のこれから先何十年かの生涯が、人間としてどんなに尊いものであり、立派なものであるかという歓喜にひたることができるとお話しされ

た。また、宗祖法然上人様の「一枚起請文」を引用されて、その中の一節「智者のふるまいをせ

ずして、ただ一回の念仏すべし」のおことばは、法然上人の最後のことばとして残され、八十年の法然上人の結論であったとおっしゃられた。そして、学問し修行し、いろいろなことをしたが、結局人間は弱い動物であつて、難しいことをいっても実行出来ないから、ただひたすらに南無阿弥陀仏と唱えよと。そうすれば、人間は立派な宗教的人格を形成し、死後涅槃の世界・極楽浄土に往生できるのだと説明された。

現世において立派な宗教的人格の形成が出来なくとも、念仏によつて来世極楽に往生し、見仏聞法そして仏になるのだという信仰をもって人生を渡っていかなければならないと、教えられたように思います。

基調講演にあたり、まず初めに光明寺の寺宝である九条竹布袈裟と松蔭の硯を見せて戴いた。この袈裟は正しく南岳大師より伝えられ、三代の法灯を受け継いできたもので、即ち円頓戒正伝の証、硯は宋朝より平清盛そして元祖、二祖、三祖へと伝えられ、七百年間の伝統をこの目で確かめて時間を超越した一時をすごした。

良忠上人は、伏見天皇より記主禪師の諡号を下賜された通り膨大な著述を残された方である。その数百巻といわれる。殆ど「浄全」に収められているが、あと金沢文庫に現存されている。

今ここに「三心私記」、「徹選撰集鈔」の二冊の本も我々の目に触れさせて戴いた。時間と空間を隔て真筆の著書を拝見すれば、七百年の時が今ここになくなる。

では三祖の自行であるが、十一才の時「往生要集」を聴かれて業の因果、即ち人間の世界の仕組みを知った。これが仏門に入るきっかけである。十八才より三十四才迄の間は、伝記を見ても空白である。これは元祖も同様で、この空白期間が自行の大切な時である。求めても求め

基調講演 「三祖記主禪師の自行化他」

大本山光明寺執事長 北邨謙順上人

ても、行じても行じても解く事の出来ない灰色の時であつたらう。南都六宗他宗の教学を研究しつづけた。その求道の期間を超えて初めて元祖の念仏の教えに会った。そして二祖と出会ふ。愚鈍の身になって念仏の道に入られた三祖。理屈を超えて感動がある。念仏に出会った感動である。念仏が輝いたのである。信念の教えに出会ったのである。自行化他を分けるとすれば、ここま

でが自行であり学問修行でもあつた。一方化他は三十九才から晩年までの期間である。著述をする一方、多くの人材が得られた。二祖の薫陶をうけて弟子達が全国に拡がり、今の浄土宗八ヶ寺の基となった。また三祖は一般民衆の為にも心を注がれた。その例として薬種あるいは「記主菜」の呼び名が残っている。

以上、伝記を通じ三祖の自行と化他について熱のこもつたお話を聞いた。北邨先生の三祖への熱情が我々の自行化他への糧となった。基調講演であつた。

(野中岳道記)

シンポジウム —現代における教化— 石川邦雄

社会のすみずみまで浸透し、人間が巨大な歯車の中に埋没する。さらにマスコミを媒介として成立した大衆社会化状況の中で、人々は時に孤独感、無力感におそわれ、人と人との絆が失なわれる。

浄土の法門は時機相応の教えといわれるが、現代という「時」はまことに複雑な様相を呈しているといつてよい。

第一に、戦後第二、第三次産業の急激な進展の中で、過疎と過密といった現象を呼び起した。そのため、過疎地の寺院は、時に成立基盤を失ない、一方過密地域の寺院はキメ細やかな教化活動が困難となる。あるいは、都市内部においても、都心から郊外へ、ないし地方へと人口が流動するにつれて、寺檀関係を基本とした教化が不可能な状況も見られる。

シンポジウムのテーマは、「自行化他―現代における教化―」。シンポジストには、平野仁司、坂野泰巨、水野賢世の三師をお招きし、司会は石川が担当した。



平野仁司 師

坂野氏は、やはり都市化の進む地域に自坊がある。檀家も多い。しか

第三に、物や心の真の価値を追求するよりは、何事もお金に換算し、お金で片付けようとするような風潮。こうした問題状況をはらんだ現代社会において、私たち青年僧侶は、どのように教化活動にあたらればよいのか。三人のシンポジストの報告は、それぞれ大変示唆に富んでいた。

平野師は、近年急速に市街化の進んが地域の中で、コミュニティ・センターとしての寺院をめざす。教化の第一歩は、現在帳の整備であったという。それに基づいて、対象の年令、階層を意識した教化活動に取り組んだ。

具体的には、元旦の集いに始まり春秋二回の研修参拝旅行、仏教講座新盆説明会、盆踊り、七五三の合同祝、歳末たすけあい鉢、除夜の鐘と浄焚式。月例活動としては、別時會、早朝写経會、詠唱會。その他二、三回寺報の発行と伝道車による布教など……。師の信条は、法務即教化、それと檀信徒に固有名詞で親しく語りかけることであるという。

求めて、都会から若い女性たちが、各地の婦人会、母親クラブの人たちが、夏休みには、泊りがけで小中学生がやってくる。

そういう寺に生まれ変わった。師は自分のやって来たことは、詠唱と書道と、毎日の昼説法だけだという。しかし「花を見せる」「料理を出す」

し、大衆社会化状況の中で、檀信徒だけでなく、より巾の広い対象者に向けて教化・布教にあたっていこうと志す。具体的には、すでに十数年に及ぶ掲示伝道とハガキ伝道、さらに電話を活用してのテレホン法話である。これが坂野師の教化活動の三本柱である。



坂野泰巨 師

の生き方の原点なのだ、という信念の中から

しかし、これらの強化活動は、単なるアイデアで始まったものではない。教化の対象は「家」でなく、「個人」におくという姿勢、さらには「清貧」と「托鉢」とが僧侶の生き方の原点なのだ、という信念の中から生まれ出て来たものだという。

水野師は、箱根の山中にある信徒寺の住職。十七年前住職となった時、信徒はわずか五十人だったという。しかしその後、うるおいのひと時を求めて、都会から若い女性たちが、各地の婦人会、母親クラブの人たちが、夏休みには、泊りがけで小中学生がやってくる。



今回のシンポジウムの成果として私たちは、これらの点をかみしめながら、今後の教化活動を考えて行きたいものである。また今回は、会場からの発言が活発であったことも意義深かった。関プロとして、毎年の大会毎に、着実に議論を積み上げていきたいものである。



水野賢世 師

三師の報告をまとめてみる、①自坊のよってたつ基盤、条件

「聞かせる説法」など、師の工夫も並大抵ではなかったようだ。

以上、



朝のおつとめ



基調講演



大本山光明寺



シンポジウム

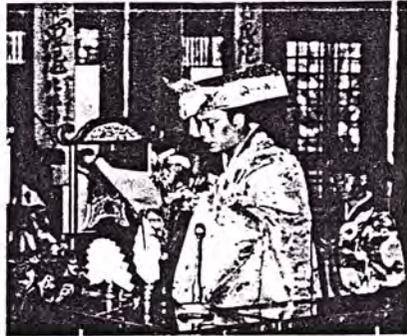


関プロ総会



懇親会—美女?4人—

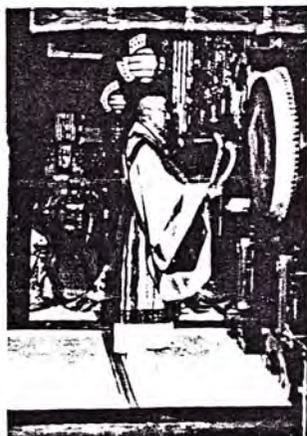
関東ブロック 神奈川大会



引声法要—表白—



懇親会—関プロ役員紹介—



引声法要—六字詰念仏—



引声法要—行道—

第七回

花まつり

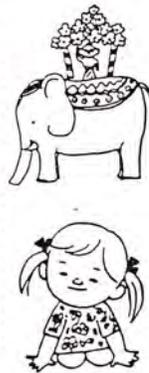
愛のプレゼント

恒例の花まつり愛のプレゼント活動は去る四月十四日(土)に実施され、今年も各組から持ち寄り寄られた多数の品物を、金沢母子寮へ贈り届けた。

この花まつり愛のプレゼントは、昭和五十三年の柴田会長時代に化他活動の一環として企画実施されたものであり、積尊の降誕会を祝して、施設のめぐまれない子供たちと積尊誕生の喜びを分かちあい、且つ物心両面のプレゼントを願って始められたものである。第一回から今回の第七回まで金沢母子寮が選ばれているが、近年、小田原の光海学園へも物品の一部を贈っている。

この日は好天にめぐまれ、母子寮の子供たちは笑顔で私たちを出迎えてくれた。セレモニーは例年の通り献香、献華、宗歌斉唱と進行し、里見会長が挨拶の中で「天にも地にもわれ一人」の言葉について、命の重みは一人一人皆平等で尊いことを子供たちに分かり易く説明した。毎年少しづつ顔ぶれの変わる子供たちだが、今年是非常に静粛で行儀よく、お話やゲームにも熱中していた。手品、ペープサート等のアトラクショ

ンに花まつりの喜びを感じてくれた事だろう。甘茶を灌ぐ子供たちの小さな手、誕生仏を見つめる小さな瞳の奥に、積尊へ対する親しみが少しでも芽生えてくれたらと思う。年に一度の短いふれあいだが、回を重ねることに私たちを信頼してくれるようになってきたと思う。この信頼に応えるべく来年も訪れたいと願うものである。
(北邨賢雄記)



会員近況報告

新入会員：白石隆弘、林田康順、水谷知靖(京浜組)、吉水祥史、鳥居一仁、余郷敦厚(三浦組)、吉川瑞教(石川順司、石川覚順、石川賢雄、井上俊道(港南組)、都築顕道(小田原組))

聖書成満：佐々木敬易(京浜組)、永原道雄(港南組)、長谷川光順(小田原組)、

住職就任：阿川文毅(小田原組)、

結婚：伊藤光史(京浜組)、吉水教雄、土川浄信(三浦組)、一真光(中郡組)

水教雄、土川浄信(三浦組)、一真光(中郡組)

総会報告

四月二十一日大本山光明寺に於て昭和五十八年度神奈川県浄土宗青年会総会が開催され、前年度報告、新役員選出・承認、成満者祝等が行なわれた。

- 一、昭和五十八年度 事業報告
- 一、昭和五十八年度 一般会計決算報告
- 一、昭和五十八年度 特別会計決算報告

新執行部は次のとおり。

- 会長 良心寺 野中岳道
- 副会長 大蓮寺 戸松秀明
- 副会長 教安寺 野呂幸忍
- 事務局 安養院 鳥居真理
- 会計 正光寺 伊香輪暁道
- 会計 伝福寺 鈴木顕雄
- 書記 西念寺 北邨賢雄
- 編集 良忠寺 森本祐康
- 編集 念仏寺 西井久雄
- 編集 一行寺 吉水智栄
- 監事 大蓮寺 里見嘉嗣
- 監事 春光院 石川邦雄

〈伝宗伝戒成満者〉

- 知恩院(昭和五十八年十二月)
- 京浜組、大光院 宮林雄彦
- 港北組 宗忠寺 夏見裕貴

増上寺(昭和五十九年二月)

- 鎌倉組 千手院 山崎純一
- 小田原組 道場院 都築顕道
- 大見寺 木村敦英
- 高座組 西光寺 三浦広心尼
- 三浦組 不断寺 山崎梢香尼
- 港南組 金台寺 奥田昭応

●五十九年度年間行事予定

- 6月1日 光明寺 第1回理事会
- 6月14日 光明寺 関プロ大会
- 7月5日 光明寺 開山忌、清掃奉仕 第2回理事会
- 7月28日 光明寺 夏期僧堂手伝い
- 8月29日 光明寺 仙台・秋保 全浄青一泊・中央研修会
- 9月下旬 光明寺 第3回理事会
- 10月上旬 光明寺 十夜前清掃奉仕
- 10月14日 光明寺 十夜法要手伝い、および念仏行進街頭伝道
- 10月上旬 未定 関プロソフトボール大会
- 10月下旬 光明寺 第4回理事会
- 11月上旬 未定 ソフトボール大会
- 11月下旬 未定 および家族親睦会
- 1月下旬 未定 第5回一泊理事会
- 2月上旬 未定 全浄一泊代表者研修会
- 2月下旬 未定 研修会
- 3月上旬 光明寺 第6回理事会
- 4月中旬 未定 花まつり、および第7回理事会
- 4月下旬 光明寺 総会および研修会